

第 38 回土木計画学研究発表会（秋大会）：2008 年 11 月 1 日～3 日（和歌山大学）
セッション討議内容の記録

セッション名：環境問題（2）	
日付：11月1日（土）、セッション時間：10：45～12：15	
司会者名（所属）：大野栄治（名城大学）	
討 議 内 容	セッション全体： 本セッションでは、「環境問題」という共通課題を「意識調査」という共通手法でアプローチした3つの研究成果が報告された。具体的な調査内容と分析方法はそれぞれ異なるが、討議は調査と分析の適切性に関する観点から展開された。
	（61）鈴木淳史（京都大学）：『印象による水辺環境における底生動物の役割に関する考察』 感性（人々の印象）で河川環境を評価するようになると、住民の好みで河川整備が進められ、河川管理上に問題が生じるのではないかと懸念が述べられた。また、住民の好みで保全する生態環境はもはや「自然の生態環境」ではなく、「人工の社会環境」ではないかとの疑問も述べられた。これに対し、本研究ではこの結果を河川整備の意思決定段階で用いるのではなく、計画段階で参考にするとの回答が示された。
	（62）細田 尚（京都大学）：『鴨川を対象とした河川整備に対する問題意識調査とその分析』 CVM やコンジョイント分析などの表明選好法で政策の経済評価を行う場合、本研究で取り上げられている賛意水準の違いより、被験者の（政策内容と受益内容に関する）理解水準の違いの方が重要ではないかとの疑問が述べられた。これに対し、本研究では被験者の理解水準は各ケースとも同じであり、今後の課題であるとの回答が示された。また、CVM における詳細な分析方法やコンジョイント分析における最適提示額セットの設定方法について、質疑・応答があった。
	（63）柿本竜治（熊本大学）：『学習による水道水飲用の意識変化に関する研究』 本研究で採用された学習の内容は短期の「座学＋試飲」であり、もっと長期の「習慣につながるような学習」が必要ではないかとの疑問が述べられた。また、パネルデータの間隔が約4ヶ月と短く、水道水飲用の習慣を変える（例えば浄水器利用を止めるなど）までに至らないのではないかとの疑問も述べられた。これに対し、地元では様々な取り組みがなされているが、親の誤った固定観念で子供が家庭内教育されるなど、なかなか意識が改善されないという背景が紹介された。